

留学生の生活の実態から日本語学校の役割を問い直す——日本語学校 卒業生「ハル」のインタビューから

平澤 栄子（早稲田大学大学院）

1. はじめに

現在、日本国内の日本語教育機関、いわゆる日本語学校には、3 万人近くの学生が在籍し、その約 7 割が日本国内の大学や大学院、専門学校等に進学をしている¹。そんな学生たちにとって日本語学校は、日本での生活を始める最初の場所であり、進学に必要な日本語を学ぶ予備教育的な機関として存在している。

筆者も長年日本語学校に勤務してきた。海外ではじめての一人暮らしを経験する学生たちは一人でアパートを借り、アルバイトを探し、日本語学校の勉強とアルバイトを両立させてたくましく生活している。そんな学生たちをサポートし、新たな生活の場へと送り出す仕事を続けながら、日本語教師の役割とは何だろうか、学生たちが必要とする日本語とはどんなものだろうかと自問することも多かった。そして、筆者のような日本語教師を含む教職員や学生が属する日本語学校とはどのような存在であるべきか。このような疑問について考えるためには、まず、学生たちが日本語学校をどのように捉えているかじっくり聞いてみる必要があるのではないかと思ったのが、本研究のきっかけである。

2. 先行研究

進学のための予備教育機関として位置づけられている日本語学校では、「日本留学試験」や「日本語能力試験」などの試験対策や、進学先で必要な予備教育的な日本語能力の育成が目指されている。では、ここでいう「日本語能力」とは何だろうか。

例えば、野田（2012）は、従来の日本語教育は「言語の教育」であり、日本語の構造や体系などの言語形式の習得を目的としていたものであることを指摘し、日本語教育研究の立場からコミュニケーションの教育への転換の必要性を主張している。しかし、ここでは

1 （財）日本語教育振興協会が 2013 年 3 月に発行した「平成 24 年度 日本語教育機関実態調査」による

「コミュニケーションとは何か」については問題にされていない。

一方、第二言語習得研究における社会的視点について論じた義永（2009）は、第二言語習得研究の主流である認知的視点と近年注目されている社会的視点を比較し、認知的視点ではコミュニケーションを「情報の流れは一方向であり、受け手があらかじめ用意したメッセージはそのままの内容を保持して送り手に届く」と捉えられるのに対し、社会的視点では、「参与者間の協同作業によって達成される動的な意味構築の過程と考える」（p.18）と説明している。また、三代（2009a）は、日本語教育で主流となったコミュニカティブ・アプローチが個人の能力の獲得という学習観によるものであることを指摘した上で、社会構成主義の学習観に立ち、日本語の学びを「日本語を技術や能力として獲得していく過程ではなく、日本語によるコミュニケーションを通じた他者との出会い、対話、関係性の構築とそれにとまなう関係の中での自己の変化、経験全体の意味づけなどの総体として捉えなおすことができる」（p.95）とする。

留学生の学びの実態を具体的に論じたものとしては、三代（2009b）や中山（2007）のライフストーリー研究がある。ここで三代は、「コミュニティへの参加の実感」が「コミュニケーションの学び」であるとする。また、中山は、日本人学生との「社会的ネットワーク構築」に注目し、言語習得に果たした役割を論じている。

以上のように日本語能力を社会的な関係性の上に成り立つものと捉え直したとき、日本語学校で予備教育的に行われている日本語教育にはどんな意味があるのだろうか。日本人と接触する機会の少ない日本語学校の学生にとっての「学び」とはどのようなものなのだろうか。本研究ではこの点を明らかにするため、「日本語によるコミュニケーションを通じた他者との出会い、対話、関係性の構築」の実態を丁寧に見ることによって、そこでの「学び」を考察し、その「学び」の実態をもとに日本語学校の役割を再考したい。

3. 研究方法

3.1. インタビューを採用した理由

本研究では、ナラティブ研究法におけるインタビュー法を採用する。やまだ（2007）によれば、インタビューの語りは「インタビュー状況のなかでインタビュアーとの共同生成的なやりとりによって生み出される生きもの」として捉えられている。本研究の調査対象者は、筆者にとって元学生であり、元教師であるインタビュアーに対して語りが展開される。日本語学校の役割について考えるとき、教師と学生という関係性によって生み出さ

れ、共同生成された内容に意味があると考えられる。

3.2. 調査フィールド

筆者が勤務していたキスゲ市にある森日本語学校（仮名）。自然に囲まれたのどかな田舎にあり、120 名ほどの留学生が在籍している。主な出身国は中国、韓国、スリランカ、ベトナム等。市内には学生をアルバイト従業員として雇っている工場、レストラン、ホテル、コンビニ等があり、学校とのつながりも深い。学生たちは市内の至る所でアルバイトをしている。

3.3. 調査協力者

森日本語学校の卒業生、ハル（仮名）。女性。中国出身。現在 21 歳。2011 年 4 月同日本語学校入学、2013 年 3 月卒業。入学当初からクラス担任をしていた教員が 2011 年 12 月から休職したため、筆者がクラス担任を引き継いだ。筆者は大学院進学のために退職した 2012 年 6 月末まで担任をしていた。ハルは日本語学校卒業後、県内の短期大学看護学科に進学し、現在 1 年生に在籍している。

ハルは明るく社交的な学生で、授業にもアルバイトにも積極的であった。また、学校で紹介した交流会やイベントなどに積極的に参加していた。彼女なら、在籍中に多様な人々との接触があったのではないかという予想のもと、インタビューを申し込んだ。

3.4. インタビュー方法

ハルとのインタビューは、2013 年 11 月 2 日と 2014 年 1 月 3 日の 2 回、計 3 時間 34 分間行われた。筆者が直接日本語で半構造化インタビューを行い、調査協力者の了承を得て IC レコーダーに録音し、後日、その音声データを文字化した。1 回目のインタビューは日本語学校在籍中、どのような人間関係があり、その関係をどのように築いていったのかを中心に、A4 用紙に人間関係図を書いてもらいながら、日本語学校在籍中のこと、今の生活について比較的自由に語ってもらった。2 回目のインタビューでは、1 回目のインタビューの確認と気になった点について詳しく聞いた。さらに、今の生活について 1 回目のインタビュー終了後の 2 か月間を中心に自由に語ってもらった。インタビュー中とインタビュー後に、筆者が気づいたこと、感じたことをフィールドノートに記した。

3.5. 分析方法

インタビューによって得られたトランスクリプトとフィールドノートをもとに分析を行った。分析は、細かく切片化することはせず、語られた内容を中心に、次の 3 つの観点で行った。

- 1) 調査協力者は誰とどのような関係を築いていたのか

- 2) その関係性はどのように構築されたのか
- 3) その人間関係と日本語学校がどのように関係していたのか

4. 研究結果

本章では、調査対象者である「ハル」のインタビューをもとに、森日本語学校があるキスゲ市において、日本語学校在籍中に行ったアルバイトでの経験を中心に記述する。なぜなら、ハルは森日本語学校在籍中、筆者の予想以上に様々なアルバイトを経験し、その経験について多くを語っていた。また、そこには日本語学校の存在が欠かせないと感じたからだ。

ハルが日本語学校在籍中に経験したアルバイトは表1のとおりである。なお、倫理的な配慮から調査協力者の匿名性を保護するため、論文中の固有名詞はすべて仮名を用いる。また、インタビューの語りからの直接引用は<>で表す。

表1 ハルの経験したアルバイト（森日本語学校入学時から卒業時まで）

企業名（仮名）	業種	仕事内容	勤続期間
マチノ製麺	製麺工場	食品加工	2011.4～2011.11（7か月間）
スシマサ	回転すし屋	洗い場、調理	2011.11～2012.1（2か月間）
あつあつカルビ	焼き肉屋	仕込み、調理	2011.12～2012.8（8か月間）
ステーキジョイ	ファミリーレストラン	接客サービス	2012.8～2013.3（8か月間）

以下にハルがアルバイト先で築いた関係性について、経験した順に説明する。

日本へ来て最初に経験したアルバイトは、森日本語学校の紹介による「マチノ製麺」であった²。マチノ製麺は森日本語学校と古くから関わりがあり、学生たちは自分でアルバイトを探すことなく、希望すれば簡単な面接のみで採用されることが多い。日本語が全く話せない状態でもアルバイトをすることが可能となっている。よって、この時点での日本語学校の役割は大きく、学生に対して手厚いサポートがなされている。また、アルバイト先での様子も教職員の耳に入りやすく、学生同士や教職員とは多くの情報や経験が共有されている。ここでの人間関係は、個々のつながりというよりは、企業としての組織的なつ

2 森日本語学校は、「無料職業紹介事業許可書」を取得し厚生労働省の認可を受けている。

ながりが強い。しかし、アルバイト先で日本語が使われることは少ないようだった。

次の「スシマサ」や「あつあつカルビ」は、ハル自身が見つけたアルバイトであった。しかし、「スシマサ」は個々のつながりが弱く、従業員との関係性ができる前に辞めてしまっている。一方、「あつあつカルビ」は新規オープンしたばかりの店で、同時期に多くの学生がアルバイトとして働き始めていた。森日本語学校の学生や卒業生同士がつながり、経験を共有している。また、ここで働く学生と店との関係を支えていたのは、オーナーと中国人であるオーナーのお母さんであった。実際インタビューでは、ここでの経験がいちばん多く語られ、ハルにとって居心地のいい場所になっていたことが感じられた。しかし、そんな居心地のいい場所であった店を、複雑な人間関係によって辞めなければならなくなる。つまり、ハルは日本語学校の学生同士という同じ経験を共有している人間関係だけでなく、違う経験を持つ従業員と関係性を築くなかで、多様で複雑な関係性に対応することの難しさにも直面している。

そして、次の「ステーキジョイ」は、現在森日本語学校の職員として働いている卒業生が学生時代に働いていたアルバイト先であり、森日本語学校との関係は組織的なつながりよりも、個々のつながりによって保たれていた。ここでハルは接客サービスの仕事を任されており、この仕事を担当していた留学生はハルだけであった。そして、ここでの経験としてハルが語った教職員の姿は、単なる教師ではなく、母であったり、森日本語学校の卒業生であったりと、別の側面を持った一個人の姿であった。

このようにして2年間のアルバイトの経験をたどったとき、日本語学校の役割は手厚いサポートからゆるいつながりへと変化している。また、それと呼応するようにハルの語りも、組織的なつながりから、個人個人の顔が見えるような関係性に焦点化していった。

5. 考察

それでは、ハルはこの2年間のアルバイト経験を通してどのような「学び」を得たのか、「学び」に焦点をあてて考察する。

ハルは、日本語学校在学中の2年間、次々にアルバイトを変えながらも、その間空白期間を作ることなく、非常にスムーズにアルバイトを見つけている。そんな積極的な彼女であっても、アルバイト先で簡単にコミュニティに参加でき、日本人とのネットワークを築いていったわけではない。ハルの話によると、忙しくて遊ぶ時間がなかったとしながらも、アルバイト先で特に親しくなり、友達付き合いをするようになった人もいないとのこと

だった。

では、三代や中山で論じられたようなコミュニケーションにおける「学び」を、ハルは得られなかったのだろうか。筆者はそうは思わない。ハルはアルバイトを変えるたびに、より日本語が必要な職種を選んでいる。特に最後のステキジョイでは「<難しそう>」と思いながらも、接客サービスの仕事に挑戦している。来日当初は、日本語を使わなくてもできる仕事から始め、徐々に日本語が使えなければできない仕事へ参加の度合いを深めていった。これこそ、日本語を使用するコミュニティへの参加であり、ハルにとっての「学び」であったと言えるのではないだろうか。

そして、ハルが参加したコミュニティは、日本語だけが限定的に使用されているわけではなかった。日本語を含んだ複数言語が使われている。そういった環境のなかでは、言語よりもむしろ共通の経験を共有するかしないかという関係性のほうが重要なのではないだろうか。そして、この共通の経験の中には共通の言語も含まれるのではないか。ハルが日本語使用のコミュニティへの参加の度合いを深める過程は、日本語学校の学生という共通の言語も含んだ経験を共有する者が減っていく過程とも重なる。そして、共通の経験者が少なくなるにつれ、別の経験を持つ者と新たな関係性を作らねばならない。このような関係性の構築こそがコミュニケーションの「学び」と言えるのではないだろうか。そういう意味では、ハルはまだ「学び」を始めたばかりだとも言える。しかし、日本語学校在籍中に徐々に日本語を使用するコミュニティや社会への参加の経験を積んでいったと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿でははじめに、「日本語能力育成」といったときの日本語能力とは何かを論じた。そして、日本語を社会的なものとして捉え直し、留学生の生活の実態から、コミュニケーションにおける「学び」を考察した。筆者はそこに確かに「学び」があったと感じている。では、その学びと日本語学校はどのように関係していたのだろうか。今回の分析により、その生活をゆるやかに支援する日本語学校の存在は見てきた。しかし、その学びと日本語学校で学んだ「日本語」がどのように関係しているのかについては、まだ見えてこない。この点について会場で意見交換を行い、さらに考察を深めていきたい。

文献

- 野田尚史（2012）.日本語教育に必要なコミュニケーション研究.野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』（pp.1-20）くろしお出版
- 中山亜紀子（2007）.韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴—「自分らしさ」という視点から『阪大日本語研究』19, 97-127.
- 三代純平（2009a）.留学生活を支えるための日本語教育とその研究の課題—社会構成主義からの示唆『言語文化教育研究』7&8, 65-99.
- 三代純平（2009b）.コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から—『早稲田大学日本語教育研究』6, 1-14.
- やまだようこ（2007）.ナラティブ研究.やまだようこ（編）『質的心理学の方法：語りをきく』（pp.54-71）新曜社.
- 義永美央子（2009）.第二言語習得研究における社会的視点—認知的視点との比較と今後の展望—『社会言語科学』12(1), 15-31.